

# さと子さまの 「安心の老後設計」



illustration : sakuma kana

さと子さんは色白で、可愛らしい感じのする女性でしたが、ひどい斜視です。なわち右の眼がロンドンを見ている時に左眼はパリを見ているという状態でした。その上に、学業成績は後ろから数えればすぐ名前が見つかりま

すが、前から数えたのではなかなか見つからないという、頭脳型ではない女性でした。母親も父親も共産党員でしたが、父親は共産党の幹部で割合に有名な人のようにして、新聞記者の方が、「アアあの人!!」と知っているくらいの人!!

幹部のようでした。母親は何となく只々ガムシヤラに「私はトッキューの頃からの黨員なんだ!!」と威張るだけの人でしたので、一般の働いている女性達は、「そうネ!! 昔は新幹線が無くて特急だけだったんですヨネ!!」と、変なところ

ろで感動を受けてしまわれる方で、さと子さんを出産するとすぐ、さと子さんを自分の母親に預けて、共産党のためという活動家でした。

でその上に眼は「ロンパリ」ではなかなかお嫁にも行けないと案じられ、アメリカで調理人として立派にやっている親族の人に頼んで、戸籍を貰ってその人の子供として届けを出しました。だから、さと子さんは、名前は解るもの見た

ことも会ったこともない、書類の上だけの人達が両親になっっています。

みたのです。もうそろそろ漁師の人達が海から帰って来る頃で、今日はお天気も良く、波も割合に静かですから、豊漁のはずだと確信を待っていたときでした。

きましたがお祖母さん一人働きではさと子さんを養っていくのは大変でした。しかし父親や母親の友人たちがとても心配をしてくれますもので、さと子さんは、なんとか四年制の田舎の女学校を卒業させてもらい、やはり父親の友人のお世話で老人ホームにお勤めすることになりました。

をしていいますので預金もタツプリアあります。認知症でもありません。さと子さんよりも若い認知症のお客様のお世話をしながら「一生懸命に親切に!!」をモットーとして毎日働いています。

さと子さんは現在でも、ホームに入居しているお客様から「さと子さん、さと子さん!!」と愛されています。

さと子さんの生みの両親は、丁度長崎に原子爆弾が落とされたその時に、長崎市におりました。長崎市で働いていた母親を訪ねて父親が久しぶりに会いにきていたそうです。二人は教会の前のベンチに腰を下ろしてゆっくりとさと子さんの将来のこと、自分たちの将来のこと等を話し合っていたのではないかと想います。それは本当に二人にとっては久しぶりのおだやかなひと時であったのだと想います。

何気なく長崎市の方向を見た時に、長崎市の空がパツ!!と明るく原子爆弾が落ちて炸裂する光を見たのです。お祖母さんは、まさかその時に自分の娘とその夫が一瞬にその光の中であの世へと送られたとは想いもつきませんでした。が、ただ何となく不安な気持ちにはなりました。

「うちは定年制ではないのだから八十歳になっても九十歳になっても、『真面目に正直に他人には親切に!』を心掛けて、出来る仕事を一生懸命にやれば、その仕事に応じたお給料を支払うから安心して働きなさい!!」と、とても親切にしてくださいます。

これからの時代は、「タイムカードをチン!!」と押して、毎時間これだけの仕事をこなさないとならないのだ!!という仕事を時間で計るやり方ではなくて、ある仕事の質と量に応じて請け負うスタイルが良いのではないかと考えている会社(老人ホーム)です。

さと子さんもその時は自分もお客様だから、「さと子さん!!」ではなくて、「さと子様」と呼ばれるのだと安心して考えているのです。さと子さんにとりましては、年をとって働けなくなることは、「さと子さん」が「さと子様」になることなのです。何という素晴らしい確信!!なのでしょう。少子高齢化時代のお手本だと想うのです。

丁度その時、原子爆弾が炸裂したのです。その日は本当に良いお天気のおだやかな日でした。

長崎に爆弾が落ちて一瞬のうちにもなくなった恐ろしい話を聞いたのは翌日のことでした。まさか、一発の爆弾で長崎市全体がなくなる等とは信じられませんでした。お祖母さんは、さと子さんを背負って長崎市まで歩いて行ってみたのです。信じられない事ですが、本当に長崎市が全くなくなっていったのです。それから間もなく、天皇陛下様のお話があり戦争は負けました。

現在では少子高齢化の時代です。高齢になっても、その年齢で出来る仕事をその仕事量の報酬として支払ってくださるのです。真面目に親切心をつくも心掛けて仕事をしていく事が大切なのだと教えられて毎日毎日一生懸命に働いているうちに、さと子さんもうとう現在七十八歳になりました。無駄遣いをしないで貯金

そのとき、さと子さんのお祖母さんは、浜におりました。さと子さんがだんだんと大きくなって自分の意見なども言うようになり、好物の煮魚を食卓にのせると、生意気に「今日のお魚は美味しいネ!!」と喜んでくれますので、漁師の友達にお魚を分けて貰おうと想い立ち、浜まで歩いて来て

段々と普通の生活が戻って

た。

岩城祐子  
大正13年栃木県生まれ、昭和54年に都市型有料老人ホームの先駆けとなる施設を開設。平成13年に特別擁護老人ホームを、平成18年に高齢者長期滞在型ホテルを開設。独特の語り口調が特徴で、著書多数。